

原作：『言語教師のポートフォリオ』(J-POSTL)

Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages

小学校英語指導者のポートフォリオ (J-POSTLエレメンタリー)

J-POSTL for Elementary-school Teacher Education



大学英語教育学会 (JACET) 教育問題研究会

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/>

『小学校英語指導者のポートフォリオ』（通称：J-POSTL エレメンタリー）
Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages
for Elementary-school Teacher Education

原作：『言語教師のポートフォリオ』（J-POSTL）（©欧州評議会，JACET 教育問題研究会，2014）

Original: *Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages* (©Council of Europe, JACET-SIG on English Language Education, 2014)

開発・編集：早稲田大学神保尚武科研グループ（2019～2021 年度）
大学英語教育学会（JACET）教育問題研究会，2021

Developed and compiled by the grant-in-aid for scientific research group (leader: Hisatake Jimbo, Waseda University) and the JACET-SIG on English Language Education, 2021

本ポートフォリオ及び関連文書は以下のウェブサイトからも無料でダウンロードできます。

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/>

This publication and other related documents are also available for download at the website above.

目 次

編集組織	ii
『小学校英語指導者のポートフォリオ』について	i
本書の使い方	4
自分自身について	7
過去の英語学習経験 / 小学校英語指導者としての不安や抱負	7
小学校英語指導者の資質・能力について	8
コラム：リフレクションについて	9
自己評価記述文	10
I 教育環境 / 11	
A. 教育課程, B. 目標とニーズ, C. 言語教師の役割, D. 組織の設備と制約	
II 教授法 / 16	
A. 話す活動 A-1. やり取り, A-2. 発表, B. 書く活動, C. 聞く活動	
D. 読む活動, E. 文法, F. 語彙, G. 文化	
III 教授資料の入手先 / 28	
IV 授業計画 / 31	
A. 学習目標の設定, B. 授業内容, C. 授業展開	
V 授業実践 / 36	
A. 授業案の使用, B. 内容, C. 児童との交流, D. 授業運営, E. 教室での言語	
VI 自立学習 / 42	
A. 児童の自律, B. 宿題, C. プロジェクト学習, D. ポートフォリオ学習	
E. ウェブ上での学習環境, F. 教室外活動	
VII 評価 / 49	
A. 評価方法の考案, B. 評価, C. 自己評価と相互評価, D. 言語運用,	
E. 国際理解, F. 誤答分析	
用語解説	55
英語学習・授業実践・研修等の記録	64
① 英語学習記録 / 64	
② 英語の授業実践記録 / 65	
③ 研修・研究授業・学会発表あるいは国際交流などの実践記録 / 67	
利用者のために	69

本ポートフォリオの紹介動画 URL:



編集組織

監 修：神保尚武（早稲田大学名誉教授）
久村 研（田園調布学園大学名誉教授）（編集統括）

編集・運営委員

米田佐紀子（玉川大学教授）（委員長）
山口高領（秀明大学専任講師）（副委員長）
長田恵理（國學院大学准教授）（副委員長）
栗原文子（中央大学教授）
清田洋一（明星大学教授）
高木亜希子（青山学院大学教授）
酒井志延（千葉商科大学教授）
中山夏恵（文教大学准教授）
安達理恵（椙山女学園大学教授）
土屋佳雅里（東京成徳大学助教）

自己評価記述文特定諮問委員（委員の所属は2017年当時）

小泉仁（座長）（東京家政大学教授，日本児童英語教育学会会長）
阿部志乃（神奈川県横須賀学院小学校英語科教諭）
加藤拓由（愛知県春日井市立鷹来小学校教諭）
竹田里香（姫路獨協大学非常勤講師，守口市立三郷小学校外国語活動支援員）
土屋佳雅里（東京都杉並区小学校英語講師）
成田潤也（神奈川県厚木市立厚木第二小学校教諭）

オブザーバー

池田勝久（文部科学省初等中等教育局教科書調査官）

協力者

赤井晴子（埼玉県鶴ヶ島市立西中学校教諭，小学校英語育成トレーナー）
犬塚章夫（愛知県刈谷市立小高原小学校校長）
北野ゆき（大阪府守口市さつき学園教諭）
若松里佳（世田谷区英語活動支援員，荒川区英語アドバイザー），他多数

小学校教職課程履修学生対象試行調査協力者

岩中貴裕（山口学芸大学教授）
檜本洋子（四天王寺大学助教）
加藤拓由（岐阜聖徳学園大学准教授）
竹田里香（立命館大学嘱託講師）
永倉由里（常葉大学教授）
藤井佐代子（中国学園大学准教授）
Gaby Benthien（秀明大学准教授），他

『小学校英語指導者のポートフォリオ』について (略称：J-POSTL エレメンタリー)

■ J-POSTL エレメンタリーとは

小学校で英語教育を担当する先生方や小学校教員養成課程で学ぶ履修生が、自らの専門性を高め、成長するために活用するリフレクション・ツールです。本書には、小学校における英語教育に必要な指導法の知識や技能がCAN-DO形式の記述文で明示されています。利用者はその記述文をもとに、自分の教師としての資質・能力や授業力を振り返り、授業改善や教職課程での学修に役立てることができます。さらに、自分の成長を確認しながら、授業実践や研修・学修を記録することもできます。本書は、中学・高校の英語教師のための『言語教師のポートフォリオ』(J-POSTL: Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages) (JACET 教育問題研究会, 2014) の姉妹編です。

■ J-POSTL エレメンタリーの言語学習・教育観

本書の原作である J-POSTL の原則的な 2 つの考え方を踏襲しています。まず、言語学習者は同時に言語使用者でもある、という視点に立ち、「言語を使って何ができるか」を重視します。従って、指導方法は学習者同士の学びと交流（インタラクション）を中心としたコミュニケーション型指導法（CLT）となります。第 2 の考え方は、生涯学習の視点から、「学び方を身につけること」を重視します。この観点は言語学習の長期目標や内発的動機づけとなり、自律的な学習者の育成につながります。自律的な学習を行うには、自立という領域での高度な学習能力が求められます。この能力の主な要素には、「学習や経験を振り返って適切な結論を引き出す」「学習方略を開発する」「自己の学習に責任を持つ」などがあります。J-POSTL は、自律的な学習者を育成するばかりでなく、自律的な教師になるためのツールとなります。以上の 2 つの観点は、『ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）』（欧州評議会, 2001）の行動志向アプローチと生涯学習という言語学習・教育観に由来しています。

■ J-POSTL エレメンタリーの編集方針

- ✓ J-POSTL の言語学習・教育観と編集形式を基に開発しています。
- ✓ 小学校教育の理念と原則に配慮した外国語教育を志向しています。
- ✓ 外国語活動と外国語の双方を視野に入れて編集しています。
- ✓ 2020 年度施行の小学校学習指導要領との整合性を考慮しています。
- ✓ 小学校の英語指導者に求められる資質・能力と授業力を明示しています。
- ✓ 授業力、基礎知識・技能のリフレクションを奨励しています。
- ✓ 同僚や指導者との話し合いを促進することを期待しています。
- ✓ 資質・能力と授業実践に対する自己評価力の向上を目指しています。
- ✓ 成長を記録する手段を提供しています。

■ J-POSTL エレメンタリーの構成

本書は次の5つのセクションで構成されています。

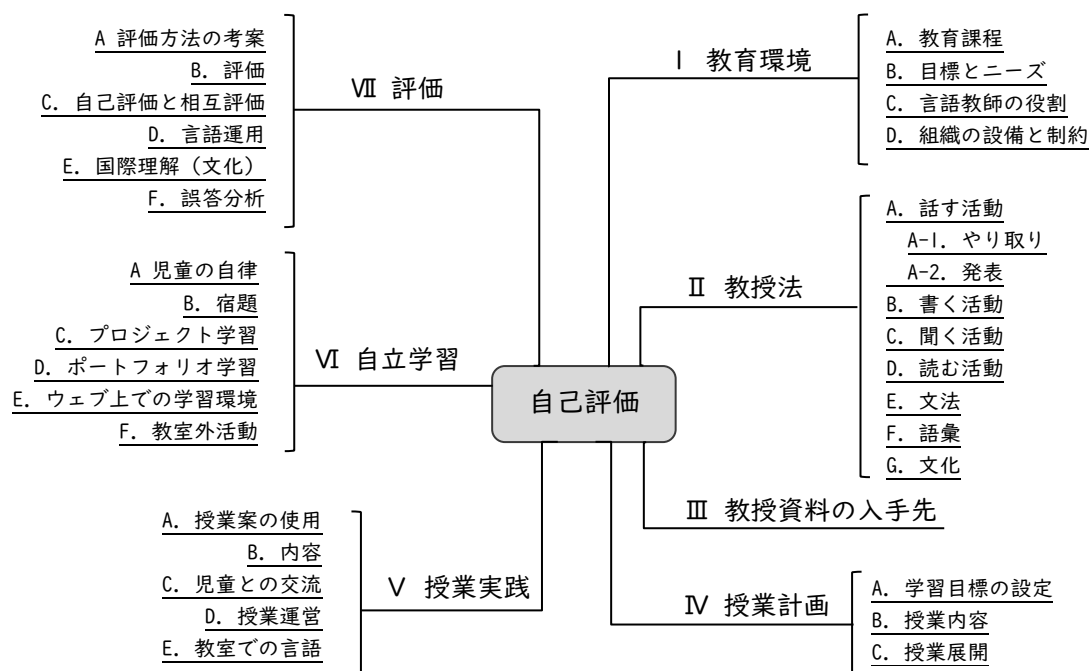
- **自分自身について：** 教員養成課程の初期段階，あるいは，教職に就いた段階で，外国語教育に関する自己の経験や全般的な課題を考察します。
- **自己評価のためのセクション：** CAN-DO 形式の記述文で構成され，リフレクションと自己評価を行うことが求められます。
- **用語解説：** 本書で使われている言語学習・教育の基本的な概念を表わす用語をわかりやすく解説しています。
- **個人学習・授業実践・研修等の記録（ドシエ）：** 教育実践や研修，あるいは，学修の実績と成果を記録しておくセクションで，自己評価の裏付け（エビデンス）となります。
- **利用者のために：** 本書の開発過程とその過程で明らかになった小学校英語指導者の特性，及び，学習指導要領との関連について役立つ情報を掲載してあります。

■ 自己評価記述文

本書の中核には，英語教育に関する 167 の CAN-DO 記述文があり，それが上記の自己評価のためのセクションを構成しています。これらの記述文は，小学校での英語教育の指導者が努力して達成することが求められる中心的な資質・能力と考えられます。

➤ 記述文の分類：

記述文は，下図のようにⅠ～Ⅶの分野に分けられています。この7分野は，英語指導者に求められる専門性の枠組みを表わしています。1つの分野を除き，それぞれの分野はA～Gの領域で構成されています。この各領域の内容に従って，167の記述文が分類されて掲載されています。

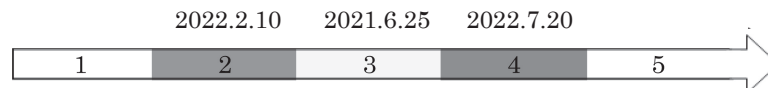


➤ 自己評価の基準：

各記述文の下には、細長い矢印ブロックがあり、その中の 1～5 の数値は自己評価の以下の基準を表わします。

1: できない 2:あまりよくできない 3:どちらとも言えない 4:まあまあできる 5:できる

自己評価が矢印ブロックであるのは、たとえ 5 のレベルに到達したと判断しても、引き続き成長を図る必要があることを象徴しています。また、自己評価を視覚的に記録しておくには、ブロックに色を塗っておくと見やすくなります。養成課程や教員研修などのいろいろな段階で、繰り返し利用することができます。教員養成課程終了時には、例えば、以下のような状態になっているかもしれません。



上記の例では、この学生は、教職課程履修中に 3 回自己評価をしており、その自己評価は 1 回目（2020.6.25）より 2 回目（2021.2.10）が下がり、3 回目（2021.7.20）で自分の授業力が向上していることを表しています。このように自己評価は下がることもあります。しかし、まだ今後伸びる余地があると考えているために、5 のレベルの矢印ブロックは空欄にしています。また、自己評価がなされた日付も記入（数字の読み方は[年.月.日]の順）しています。大事なことは、教職課程の終了時点では、矢印ブロックを色と日付ですっかり埋めつくすことはありえないということです。教え方を身につけ、よい先生になるということは、継続的で生涯にわたるプロセスなのです。

➤ 記述文の能力スケール（暫定）：

教師の指導力は通例、教職経験を積むごとに向上していきます。そのことを前提として、167 の自己評価記述文は調査を経て以下の能力スケールに分類しています。

スケール	履修生	初任	育成	中堅	熟練
記述文数	70	36	19	23	19

上記の 5 段階のスケールは以下のような教職の経験年数を目安としていますが、必ずしもそれだけを基準としているわけではありません。人には得意・不得意がありますので、それを見極める判断基準として柔軟に対応してください。各記述文の文尾には能力スケールを次のような記号で表しています。

- ・ 無印：教職課程履修生用
- ・ ㊦：Novice＝初任教員用
- ・ ㊧：Apprentice＝育成教員用（5 年程度）
- ・ ㊨：Practitioner＝中堅教員用（5 年以上～15 年程度）
- ・ ㊩：Expert＝熟練教員用（15 年以上）

本書の使い方

■ 使用目的

本ポートフォリオは、教職課程履修生や現職教員がそれぞれの教育環境で経験したことや学んだことを継続的に記録し、自分の成長に役立てるために使うものです。成長を記録し振り返ることで、自己の長所や改善点に気づき、教職に対する気づきや学びが促され成長につながります。

■ 使用上の3つのポイント

➤ 記録する：エビデンスづくり

- ・ 履修生は教職課程履修中に、必要に応じて「個人学習・実践記録」に自己の学習や教育実践を記録しておきましょう。発表や面接のときなどの貴重な資料として活用できます。
- ・ 現職教員は授業改善の試み、研修会・学会などでの参加・発表などの成果を記録しておきましょう。

➤ 振り返る：リフレクションに基づいて自己分析をする

- ・ 履修生は教職課程履修中に、少なくとも3回は自己評価記述文で自分自身を振り返り、自己の課題について考える習慣をつけましょう。
- ・ 履修生も現職教員も自己分析の資料として活用しましょう。
- ・ 教職に携わっている限り、自分の成長のための振り返りの道具として、ポートフォリオを利用し続けましょう。

➤ 相談する：意見交換をして、今後に活かす

- ・ 履修生は指導者や教育実習先の先生にポートフォリオを見てもらい、適切な助言を受ける機会を作りましょう。
- ・ 小学校英語指導者のあり方や授業実践などについて、仲間同士で話し合う機会を持ち、その際にポートフォリオを活用しましょう。

■ 各セクションの使い方

➤ 自分自身について

ポートフォリオを受け取った時点ですぐに記入しましょう。これまでの自分の英語の学習経験や授業実践を振り返り、指導方法や授業内容を考えることは、英語の指導を考える上で重要な土台となります。この振り返りを通して、英語の指導者として大切な資質能力について考え、仲間・同僚・指導者と話し合いましょう。履修学生は教職課程や教育実習に対する期待や不安も書いてください。

➤ 自己評価のためのセクション

7つの分野（Ⅰ 教育環境、Ⅱ 教授法、Ⅲ 教授資料の入手先、Ⅳ 授業計画、Ⅴ 授業実践、Ⅵ 自立学習、Ⅶ 評価）それぞれがCan-do記述文で構成されていますが、単なるチェックリストではありません。詳しくはコラム「リフレクションの意義について」（p.9）を参照してください。

➤ 英語学習・授業実践・研修等の記録

ポートフォリオを受け取ってから、以下の 3 つの分野について記録してください。自己評価記述文に対する自分の判断の根拠や、判断が適切であるか否かを示すための記録で、仲間や先生と話し合うときに利用できます。

① 英語学習記録

資格検定試験の結果、留学など、英語の学習や英語学習の成果について記入しましょう。

② 英語の授業実践記録

教育実習、模擬授業、授業観察、学習支援学校でのボランティア、塾講師、家庭教師、仲間とのプロジェクト学習、学校行事補助などを記入しましょう。

③ 研修・研究授業・学会発表あるいは国際交流などの実践記録（現職教員用）

学校内外での研修、研究授業、学会発表、国際交流などについて記入しましょう。

■ 記入時期と方法

➤ 記入頻度

《履修生》受け取ったときにまず書き込みましょう。その後、教科教育法や専門的事項の科目（例：英語概論）の履修後や教育実習の前後などです。目安として半年に一回は振り返ることで、専門的知識や技術の向上を確認することができます。

《現職教員》学期始めと学期終わりや研修の際などに振り返ることで自分の指導を見直すことができます。

➤ 授業力自己評価の記入方法（p.3「自己評価の基準」参照）

- ・ 各記述文には自己評価をするための矢印ブロックがあります。各項目に対して自らの到達度に対する意識を上記の 5 段階で判断してください。矢印であるのは、たとえ 5 のレベルに到達したとしても、教師はさらに成長を続ける必要があることを象徴しています。
- ・ 全項目のうち、自分が取り組んだ項目について自己評価を行い、記入してください。自己評価の基準は以下のとおりです。

5-できる, 4-まあまあできる, 3-どちらともいえない, 2-あまりできない, 1-できない

- ・ 矢印ブロックへの記入方法は、各回の自己評価を色で区別することをお勧めします。変化の有無が色付けすることにより、一目で確認できるためです。

■ 教職担当教員、及び、現職教員の先生方へ

本ポートフォリオはすべてを利用する必要はありません。各大学のカリキュラムに合わせて、利用できる箇所を柔軟にお考え下さい。以下に代表的な活用事例を紹介します。

【教職課程】

➤ 利用場面：教職科目における J-POSTL エレメンタリー導入時の授業

利用箇所：自分自身について

利用方法：特に「過去の英語学習経験」と「小学校英語指導者としての抱負」についてそれぞれが記入した後に履修生同士で議論のテーマとして利用します。「資質・能力について」は時機を見て利用すると効果的です。

- 利用場面：教職課程履修開始から終了時
利用箇所：自己評価記述文（履修生用）
利用方法：授業の内容に合わせ、該当する記述文を利用してグループで話し合いをさせるなど、記述文の背景にある教師の資質・能力や授業力について理解を深めます。
- 利用場面：教職課程履修開始から終了時
利用箇所：英語学習・授業実践・研修記録表
利用方法：模擬授業や教育実習をはじめ教職や英語学習に関する学習・授業実践の記録をつけるよう指導します。授業案、学習ノート、英検の受験結果などは自己評価の証拠資料として保存させます。
- 利用場面：教職科目における模擬授業
利用箇所：自己評価記述文
利用方法：模擬授業のテーマに沿って選んだ記述文を基に授業案を作成するよう指導します。模擬授業終了後に、履修生同士で選んだ記述文に基づいて授業評価や実践を支える理論について話し合う時間を設けます。
- 利用場面：教育実習指導
利用箇所：自己評価記述文の「授業計画」と「授業実践」
利用方法：教壇実習前に記述文を選んで授業の狙いや目的を設定するよう指導します。実習後は利用した記述文を基に履修生と授業実践を振り返ります。

【現職教員】

- 利用場面：年間を通して（校内自主研修を含む）
利用箇所：自己評価記述文と学習・実践記録表
利用方法：勤務校の指導方針に沿って各学年と各学期にふさわしい記述文を選定します。選定した記述文を基に、それぞれの授業の狙いや目的を設定します。授業での主な活動は実践記録表に記載し、作成したワークシートなどの教材は保存しておきます。学期や学年の終了時に、記述文と実践記録・教材を基に授業実践を各自で振り返るとともに、同僚と話し合います。この利用方法は、自分の授業実践を踏まえ、記述文を変えながら毎年繰り返すとよいでしょう。
- 利用場面：研究授業の前後
利用箇所：研究授業のテーマに沿って選定した自己評価記述文と学習・実践記録表
利用方法：研究授業前に、選定した記述文を参考に授業の狙いや目的を設定します。研究授業後、記述文を基に研究授業を各自で振り返るとともに、同僚や協議会参加者と話し合います。これらの結果を学習・実践記録表に記録しておきます。
- 利用場面：初任者研修
利用箇所：自分自身についての1・4と自己評価記述文
利用方法：指導者（メンター）は、初任者が記述した自分自身についての1と4の内容について、初任者と話し合います。次に、初任者と相談の上、担当する授業で必要とされる記述文を選びます（多くても10記述文）。授業開始後、折を見て初任者に声をかけ、進捗状況を確認し、必要なら支援します。学期と学年終了時には、初任者は選んだ記述文を自己評価し、それに基づいて課題や改善策を話し合います。

自分自身について

■ 過去の英語学習経験

これまでの自分の英語の学習経験を振り返り、その教え方や授業内容等を考えることは、英語の指導を考える上で重要な土台となります。ためになった、あるいは、良くなかったと思う授業について、いつ、どこで、どのような授業内容・方法だったかを理由をつけて記述してください。

a) 良かったと思う授業内容や方法とその理由

b) 良くなかったと思う授業内容や方法とその理由

■ 小学校英語指導者としての不安や抱負

小学校英語指導者として、不安に感じることを書きましょう。次に、その不安を解決するためにどのような準備をし、教壇に立ってどのような授業を展開していきたいかなどの抱負を書きましょう。

■ 小学校英語指導者の資質・能力について

前頁の経験や抱負をグループで共有し、小学校英語指導者の資質・能力について話合ってみましょう。小学校英語指導者として外国語(英語)を指導する際に大切だと思われる資質・能力は何でしょうか。以下に書かれている項目はそれぞれ、どれくらい重要ですか。重要度を 5 段階 (5-重要である, 4-まあまあ重要である, 3-どちらともいえない, 2-あまり重要でない, 1-重要ではない)で判断してください。

	項目	重要度
1	児童の学習意欲への配慮ができる	5 4 3 2 1
2	英語の基礎的な知識を教えることができる	5 4 3 2 1
3	同僚との協力的な姿勢を持つことができる	5 4 3 2 1
4		5 4 3 2 1
5		5 4 3 2 1
6		5 4 3 2 1
7		5 4 3 2 1
8		5 4 3 2 1
9		5 4 3 2 1
10		5 4 3 2 1

以下の例を参考にして、履修者・同僚と各項目について話し合ってみましょう。

①例えば「英語の基礎的な知識を教えることができる」に対して、あなたが「5-重要である」と判断した場合、どうして重要だと考えるのか、共に学ぶ者同士ペアあるいはグループのメンバーに具体例を出しながら説明をしてみましょう。

②次に「英語の基礎的な知識を教えることができる」とはどのような能力なのか、ペアあるいはグループで話し合いましょう(例: 子どもに分かりやすく英語の文のルールを説明できるなど)。

また、上記以外にどのようなことが必要でしょうか。上の表の4番以降に付け加えましょう。

リフレクション（省察）の意義について

■ リフレクションの重要性－省察なくして成長なし－

自己評価記述文のセクションでは、167 の記述文に対して、チェックリストのように、直観的に回答するだけでは効果は望めません。まずそれぞれの記述文の内容をよく考えてください。その上で、自分の学修や授業実践で得た知識や経験を振り返りながら回答してください。一人で振り返ることは、自立した思考力をつけるために必要ですが、視野を広げ多角的なものの見方や考える力を身につけるには仲間や指導者と話し合うことが大切です。このようなリフレクション（省察）を繰り返すことにより、教師として、また、人間として成長し、客観的な自己評価ができるようになります。

➤ 履修生のみなさんへ

はじめは自己評価記述文の数の多さに圧倒されるかもしれません。また、内容が理解できない記述文も多数あるかもしれません。しかし、すぐに諦めないでください。まずは履修生対象の記述文をじっくり読み、どのようなことができるようになる必要があるかを大雑把につかんでください。英語科教育法や英語の専門科目の授業にはテキストと一緒にこの J-POSTL エレメンタリーも持参しましょう。授業中に記述文と関連する事項が出てきたらチェックしておきましょう。模擬授業や教育実習では、教案作りや授業後の話し合いに自己評価記述文を活用しましょう。このような行動を通して、記述文の意味を理解し、リフレクションの方法を身につけてください。

➤ 現職の先生方へ

自己評価記述文を一読すると、英語以外の教科にも当てはまる指導力が多々含まれていることに気づかれるでしょう。従って、まず、先生方がこれまで培った様々な教科指導のノウハウを、英語の授業でも生かすよう心掛けてください。次に、英語に特化した知識や指導技術に関しては、勤務校の同僚と話し合いながら、記述文に優先順位をつけて授業で実践できるような力をつけましょう。年間指導目標や、教科書の単元の学習目標・ねらいを作成するときにも記述文を活用しましょう。手順としては、適切な記述文を選定する⇒具体的な指導方法を考えてみる⇒その方法を授業で実践してみる⇒実践した内容を振り返り評価する⇒改善する、というサイクルができるとういでしょう。繰り返し記述文を参照する習慣をつけることで成長が可視化でき自信もつくでしょう。

自己評価記述文

■ 自己評価記述文目次

I 教育環境 11	V 授業実践 35
A. 教育課程 / 12	A. 授業案の使用 / 36
B. 目標とニーズ / 13	B. 内容 / 37
C. 言語教師の役割 / 14	C. 児童との交流 / 38
D. 組織の設備と制約 / 15	D. 授業運営 / 39
	E. 教室での言語 / 40
II 教授法 16	VI 自立学習 41
A. 話す活動	A. 児童の自律 / 42
A-1. やり取り / 17	B. 宿題 / 43
A-2. 発表 / 18	C. プロジェクト学習 / 44
B. 書く活動 / 19	D. ポートフォリオ学習 / 45
C. 聞く活動 / 20	E. ウェブ上での学習環境 / 46
D. 読む活動 / 21	F. 教室外活動 / 47
E. 文法 / 23	
F. 語彙 / 24	VII 評価 48
G. 文化 / 25	A. 評価方法の考案 / 49
III 教授資料の入手先 27	B. 評価 / 50
	C. 自己評価と相互評価 / 51
IV 授業計画 30	D. 言語運用 / 52
A. 学習目標の設定 / 31	E. 国際理解（文化） / 53
B. 授業内容 / 32	F. 誤答分析 / 54
C. 授業展開 / 34	

■ 能力スケール

各記述文の文尾の記号は、原則として、以下の意味を表します。自分の得意・不得意を見極める判断基準としても利用してください。

- ・ 無印：教職課程履修学生用
- ・ ㊦：初任教員用：N=Novice
- ・ ㊧：5年未満の育成教員用：A=Apprentice
- ・ ㊨：5年以上の中堅教員用：P=Practitioner
- ・ ㊩：15年以上の熟練教員用：E=Expert

I 教育環境 (Context)

序文

概要

本分野では、授業を計画・実施する際に影響を受ける、教育的・社会的環境に関わる事項について扱います。まず、日本の教育の方向性を定める学習指導要領をはじめとした教育施策や小学校の教育課程などの理解が求められます。加えて、授業に直接関わる、英語学習の目標、児童の英語学習に対する動機づけやニーズの理解、勤務校の教育環境の整備状況などの事項も重要になります。これらは、言語教師の役割にも影響を及ぼします。

言語教師には、教科に関わる専門的知識の理解に加え、児童の発達段階による特性や、児童が置かれている教育環境の理解なども求められます。また、児童や同僚からのフィードバックを受け、自らの授業を批判的に振り返り評価するなど、専門性の向上に継続的に努めることも大切です。

領域

A. 教育課程 (Curriculum)

学習指導要領やコア・カリキュラムなど、教師として理解しておくべき教育的枠組みについて扱います。

B. 目標とニーズ (Aims and Needs)

英語学習の意義や児童の動機づけとニーズなどを踏まえた目標の設定について扱います。

C. 言語教師の役割 (The Role of the Language Teacher)

児童の置かれた教育的・社会的環境の理解に加え、言語教師として成長するための方法について扱います。

D. 組織の設備と制約 (Institutional Resources and Constraints)

勤務校や実習校における教育設備の活用について扱います。

A. 教育課程 (Curriculum)

1. 学習指導要領に記述された内容を理解できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 学習指導要領に従って、小学校英語の教育課程や年間指導計画を立案できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 学習指導要領以外の小学校外国語教育に関する公的なガイドライン（例：コア・カリキュラム，カリキュラム・マネジメントなど）の内容を理解できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

B. 目標とニーズ (Aims and Needs)

1. 児童が英語を学習する動機を考慮できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童の知的関心を考慮できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 児童の達成感を考慮できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 英語を学習することの意義を理解できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 学習指導要領と児童のニーズに基づいて到達目標を考慮できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

C. 言語教師の役割 (The Role of the Language Teacher)

1. 計画・実行・振り返りの手順で、児童や授業に関する課題を認識できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童からのフィードバックや学習の成果に基づいて、自分の授業を批判的に評価し、状況に合わせて変えることができる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 同僚や授業見学者からのフィードバックを受け入れ、自分の授業に反映できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 授業や学習に関連した情報を収集できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 同僚の授業を観察し、改善のポイントを建設的にフィードバックできる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. 児童の母語の知識に配慮し、英語を指導する際にそれを活用できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

7. 児童と保護者に対して英語学習の意義や利点を説明できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

8. 児童の認知的、精神的、社会性の発達を理解して、自分の授業を批判的に評価できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

9. 外国人留学生、外国人の子弟、帰国生など文化背景や学習経験の異なる児童によって構成されたクラスで教える場合、クラスの多様性の価値を理解し、それを活用できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

D. 組織の設備と制約 (Institutional Resources and Constraints)

1. 勤務校における設備や教育機器を，授業などで状況に応じて活用できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



II 教授法 (Methodology)

序文

概要

本分野では7つの領域を扱います。コミュニケーション能力の育成のために、4技能5領域（読むこと、聞くこと、話すことーやり取りと発表ー、書くこと）の統合を意識した指導が必要です。また、それらを下支えする役割としてこれらの技能と関連づけて文法や語彙を指導すると効果的です。もちろん、各記述文が示す個別の技能の向上は必須です。しかし、実際の授業では、2つ以上の技能を組み合わせるどのように指導するか、また、文法や語彙をどのように関連づけるかについて考えることが大切です。さらに、言語と文化は切り離せないため、技能の育成だけでなく文化の視点も融合できるようにします。

領域

A. 話す活動 (Speaking)

やり取り (Spoken Interaction) と発表 (Spoken Production) の2つに分かれています。情意面、音声面、非言語面を含め、話す力の育成に必要な活動の設定について扱います。

B. 書く活動 (Writing/Written Interaction)

文字の習得は今後の学習に大きな影響を与えるので、入念に指導する必要があります。音声で慣れ親しんだ語句や表現を書く活動の設定や支援のあり方について扱います。

C. 聞く活動 (Listening)

聞く力の育成に必要な教材の選択、活動の計画、支援のあり方について扱います。

D. 読む活動 (Reading)

この活動は比較的限られていますが、読むことへの興味・関心を高めるために必要な教材の選択、活動の設定、支援のあり方について扱います。

E. 文法 (Grammar)

言語活動を下支えする文法指導のあり方について扱います。

F. 語彙 (Vocabulary)

文脈を考慮した語彙を用いた活動の設定と目的に応じた語彙の指導を主に扱います。発展的な指導として、辞書の利用についても扱います。

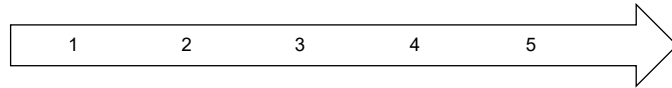
G. 文化 (Culture)

自文化と異文化に関する興味・関心を喚起し、文化への気づきを促す活動の設定や社会的文化的能力を育成するための教材の選択について扱います。

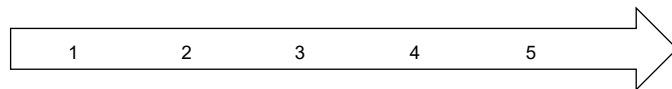
A. 話す活動 (Speaking)

A-1. やり取り (Spoken Interaction)

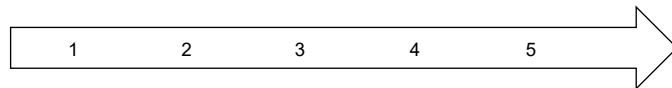
1. 児童を話す活動に積極的に参加させるために、協同的な雰囲気を作り出し、具体的な言語使用場面を設定できる。



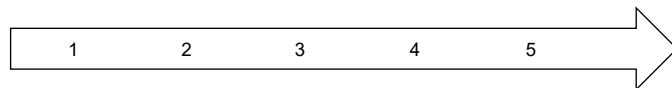
2. 知り合いや初対面の人と挨拶を交わしたり、相手に指示・依頼などをして、それらに応じたり断ったりするための活動を設定できる。



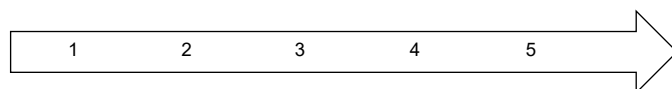
3. 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の気持ちや意見を伝え合う力を育成するための活動を設定できる。



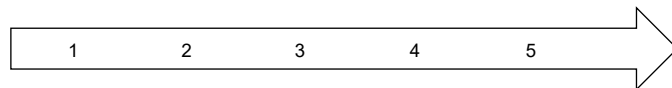
4. 自分に関する質問に答えたり、相手のことを尋ねたりする短いやり取りができる力を育成するための活動を設定できる。



5. 表情，ジェスチャー，あいづちなどの非言語コミュニケーションを効果的に使って、相手とやり取りができる力を育成するための活動を設定できる。



6. 相手の言ったことに対する確認や聞き返しができる力を育成するための活動を設定できる。



A-2. 発表 (Spoken Production)

1. 自分の好き嫌い、趣味、得意なことなど、聞き手に伝えたい内容を整理してから、基本的な語句や表現を使って紹介することができる力を育成するための活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 身の回りの事物や日常生活について、基本的な語句や表現を使って話すことができる力を育成するための活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 自分の居住地、学校生活、友人・知人に関することなどについて、基本的な語句や表現を使って自分の気持ちや考えを話すことができる力を育成するための活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 強勢、リズム、イントネーションなどの違いに気づかせるような様々な活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 少ない語彙や非言語コミュニケーションを用いて積極的に話す力を育成するための活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. 発話を促すような視覚補助教材、印刷教材など、オーセンティックで多様な教材を選択できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

B. 書く活動 (Writing/Written Interaction)

1. 児童が文字，語句，表現を，書き写したり書いたりすることへの意欲を高めるような活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童が慣れ親しんだ英語の語句や表現を，書き写したり書いたりすることができるようになるための様々な活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 児童が慣れ親しんだ英語の語句や表現を，大文字・小文字の使い方，語と語の区切り，基本的な記号などを意識して書く活動を設定できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 児童が持っている書く能力を伸ばすために，慣れ親しんだ表現を，語順を意識しながら書き写すことができるような活動を設定できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 児童が書く活動を行うことができる様々な場面を設定できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. 児童が慣れ親しんだ語彙や語順を活用して，自分のことや自分の身の周りのことについてメモや手紙などでやり取りを行う活動を支援できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

C. 聞く活動 (Listening)

1. 児童の興味・関心に適した教材を選択できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童が英語を聞く前に、教材のトピックについて持っている経験や関連知識を使って内容を予測するよう指導できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 児童が教材のポイントをしぼって聞くことができるような活動を計画できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 聞く活動において、発音された文字や、新出単語もしくは難語に児童が対処できるように支援できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

D. 読む活動（Reading）

1. 絵本などの読み聞かせ（音声を伴った、英語の絵本を使った活動）において、児童が内容や文字に関心を持つような活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. アルファベットを識別し、その読み方を適切に発音することができる力を育成するための活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 児童のニーズ、興味・関心、到達度に適した教材を選択できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 児童が語句や文を読む際に、持っている経験や関連知識を使うよう指導できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 児童の興味・関心を高めるために到達度に合った本や資料を紹介できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

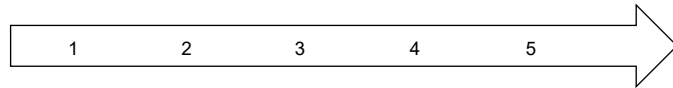
6. 指導した内容や表現を踏まえた発展的な活動を設定できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

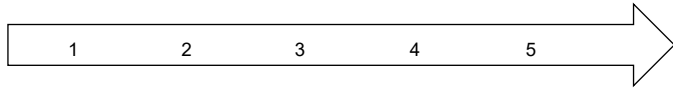
7. 教材や目的に応じて、音読、黙読、グループリーディング（例：一斉読み、一文読み、指差し読み）など適切な読み方を導入できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

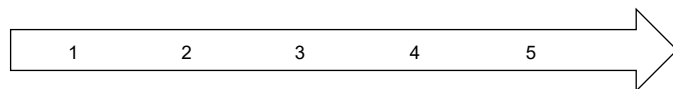
8. 慣れ親しんだ語句や文を使った一人読みを促す指導ができる。⑰



9. 児童に難語や新語に対処する様々なストラテジー（方略）を身につけさせるよう支援できる。⑱



10. 児童が必要とする情報を得るための読み方（例：スキミング、スキミング）を身につけるよう支援できる。㉑



E. 文法 (Grammar)

1. 文法は、コミュニケーションを支えるものであるとの認識を持ち、使用場面を提示して、言語活動と関連づけて、児童に気づかせる指導ができる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 語順や語尾の変化など、英語特有の言葉のきまりに気づかせるための様々な工夫ができる。⑨

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

F. 語彙 (Vocabulary)

1. 文脈の中で慣れ親しんだ語彙を使用できるような言語活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童が適切に自己表現できるようになるための語彙を例示できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 使用場面、目的、相手との関係などによって使う語彙や表現が異なることに気づかせる活動を設定できる。⑤

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 使用頻度の高い単語・低い単語、あるいは、受容語彙や発信語彙のいずれであるかを意識した指導ができる。⑤

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 児童に適切な辞書（例：英絵辞典、和英辞書）を提示し、具体的にそれらを引用して説明を行え、また、それらを児童が使えるように指導できる。⑤

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

G. 文化 (Culture)

1. 英語学習をとおして、自分たちの文化と異文化に関する興味・関心を引き起こすような活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童に文化への気づきを促し深める活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. ICT 等を用いて、様々な地域、人々、文化などについての調べ学習の機会を与えることができる。㊸

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 社会文化的能力を児童が伸ばすことに役立つ活動（ロールプレイ、場面を設定した活動など）を設定できる。㊸

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 児童に社会文化的な規範(習慣や決まりなど)の類似性と相違性を気づかせる様々な種類の教材や活動を選択できる。㊸

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

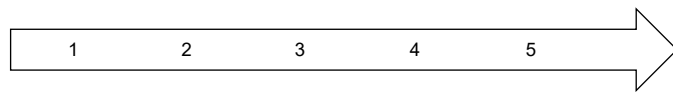
6. 他者との関わりを意識し、価値観の相違への気づきや理解を促すことに役立つ、様々な種類の教材や活動を選択できる。㊸

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

7. 児童に文化とことばの関係性に気づかせる教材や活動を選択できる。㊸

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

8. 児童が自分のステレオタイプの考え方に気づき，それを見直すことができるような様々な種類の教材や活動を選択できる。⑤



Ⅲ 教授資料の入手先 (Resources)

序文

概要

本分野では、教師が利用できる様々な教授資料について扱います。教授資料には、教科書、教材、参考資料（事典、図鑑や文学作品など）や指導案に加え、学習者が活用できる図書館や ICT などの教育設備も含まれます。また、学習者による作品も、授業に活用できる教授資料と捉えることができます。教師は、各学校や児童の実態に合わせて、これらの教授資料を選択したり、これらを活用した教材や活動を考案したりすることで、指導に活かしていくことが求められます。

1. 教科書付属の教師用指導書や補助教材にあるアイデア、授業案、教材を利用できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童の年齢、興味・関心、英語力に適した教材を選択できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 児童の英語力に適した表現や言語活動を教科書や教材から選択できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 教科書以外の素材（絵本、事典、図鑑、文学作品、新聞、ウェブサイトなど）から、児童のニーズに応じた教材を選択できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 個々の児童を考慮した適切な教材や活動を考案できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. 児童に適切な ICT を使った教材や活動を考案できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

7. 児童の能力や興味・関心に応じて、適切な ICT を使った教材を選び、活用できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

8. 児童に適切な ICT 教材を利用し、評価できる。㊦

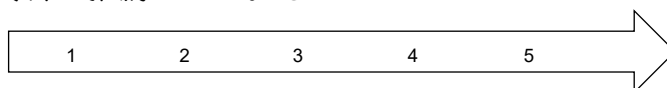
1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

9. 情報検索のために図書館やインターネットを使えるように児童を指導できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

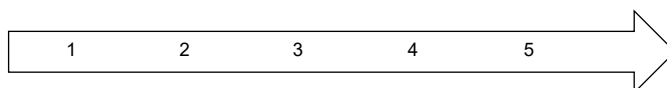
10. 児童に役に立つ辞書や参考資料を推薦できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



11. 児童に対して，自分や他の児童のための学習材料となるような作品を作るよう指導し，それを活用できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



IV 授業計画 (Lesson Planning)

序文

概要

本授業計画の分野では、効果的な授業を行うために必要な授業計画の考え方について3つの領域を扱います。具体的には学習の目標を設定する目的とその際に配慮する観点についての記述文となります。例えば日常の授業の計画を立てるには、年間指導計画や意欲、また伸ばす技能などを考慮して目標を設定します。さらに、その目標に即した授業内容を検討します。また、児童の場合、特にそれまで学んだ知識の活用や学習活動の反応を考慮することが大切です。このような点を検討して、設定した内容を指導する方法と望ましい学習活動について扱います。

領域

A. 学習目標の設定 (Identification of Learning Objectives)

学習指導要領の内容、児童のニーズ、興味・関心、意欲、技能の観点別評価などを考慮して、学習目標を設定することについて扱います。

B. 授業内容 (Lesson Content)

児童のやる気・興味・関心を引き出すような活動や、それまで学んだ内容について配慮しながら、「4技能5領域」が統合的に取り込まれた指導計画、さらに授業の時間配分などについて扱います。

C. 授業展開 (Lesson Organization)

授業内容に沿った授業形式や様々な活動の場面を考慮して選んだり授業を設計するための方法を扱います。

A. 学習目標の設定 (Identification of Learning Objectives)

1. 児童のニーズ，興味・関心を考慮し，学習指導要領の内容に沿った学習目標を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 年間の指導計画に即して，単元や授業ごとの学習目標を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 児童の意欲を高める目標を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 児童が自分の学習を振り返ることができるような目標を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 年間の指導計画に基づいて，「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「読むこと」「書くこと」の領域別に観点別評価の目標を設定できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. 児童の習熟度の違いや特別な支援の必要性に配慮した目標を設定できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

B. 授業内容 (Lesson Content)

1. 児童のやる気や興味・関心を引き出すような活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 児童の反応や意見を授業に反映できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 年間の指導計画に基づいて、授業を柔軟に設計できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「読むこと」「書くこと」の5つの領域が総合的に取り込まれた指導計画を立案できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. 目標とする学習活動に必要な時間を把握して、指導計画を立案できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

7. 児童の学習スタイルに応じた活動を設定できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

8. 教科横断的な内容、あるいは様々な教科の内容を学ぶことができるような指導の手立てを考案できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

9. 言語と文化の結びつきに気づかせるような活動を立案できる。⑤

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

10. 文法学習や語彙学習をコミュニケーション活動に統合させた指導計画を立案できる。⑤

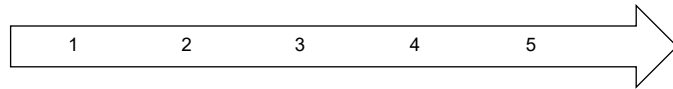
1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

11. 教材，授業内容，授業の進め方などに関して，児童と協同し，彼らの意見も取り入れた指導計画を作成できる。⑤

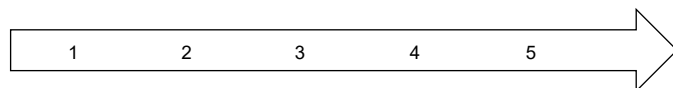
1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

C. 授業展開 (Lesson Organization)

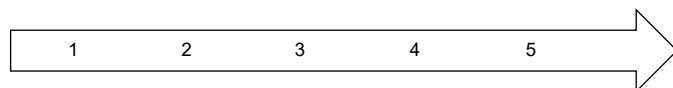
1. 学習目標に沿った授業形式（一斉、個別、ペア、グループなど）を選び、授業を設計できる。



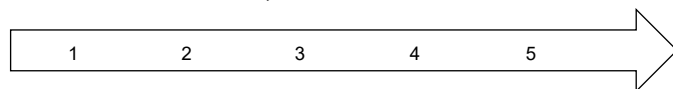
2. 児童同士のやり取りを促す活動計画を立案できる。



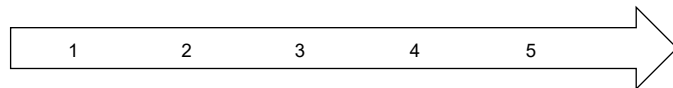
3. 児童の発表を促す活動計画を立案できる。



4. 英語を使う場面，方法，タイミングを考慮して，授業を設計できる。



5. ALT や他の教員とのチームティーチングの授業を設計できる。㊦



V 授業実践 (Conducting a Lesson)

序文

概要

本分野では設定した授業計画を実践していくために必要な5つの領域を扱います。授業案に沿った指導を小学校において効果的に実践するには、児童の興味・関心に配慮し、状況に応じて個人やグループでの活動を柔軟に調整することが大切です。児童の集中力に配慮した時間配分も重要な要素となります。また、実際の指導方法として、児童中心の活動、教科書以外の視聴覚教材の活用、児童の言語能力や知識に配慮した英語の使用なども重要な要素となります。

領域

A. 授業案の使用 (Using Lesson Plans)

指導案に沿った授業を行う際の配慮すべき観点について扱います。特に児童の学習状況に配慮した柔軟な対応が必要となります。

B. 内容 (Content)

授業で扱う内容を児童の経験、知識、身近な出来事に関連づけることが重要となります。

C. 児童との交流 (Interaction with Learners)

児童の集中力への配慮と、児童中心の活動や児童間の交流について扱います。

D. 授業運営 (Classroom Management)

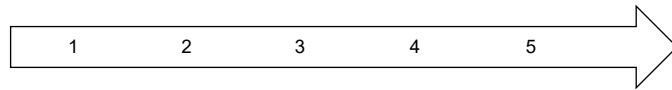
個人や集団での活動や効果的な教材、ツールについて扱います。

E. 教室での言語 (Classroom Language)

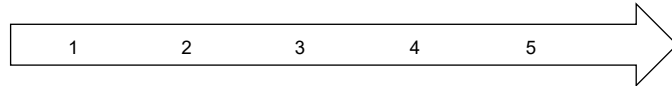
児童の言語能力への配慮と、授業での日本語と英語の使用方法について扱います。

A. 授業案の使用 (Using Lesson Plans)

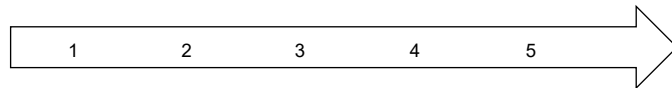
1. 児童の興味・関心を引きつける方法で授業を開始できる。



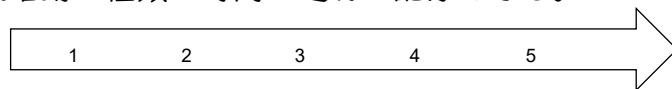
2. 個人活動，ペア活動，グループ活動，クラス全体など，状況に応じて学習の形態を柔軟に調整できる。



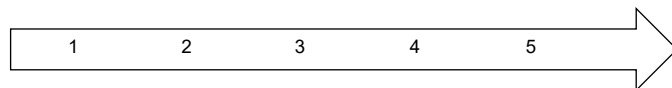
3. 授業案に基づいて柔軟に授業を行い，授業の進行とともに児童の興味・関心に対応できる。



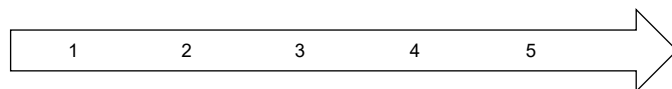
4. 児童の集中力を考慮し，授業活動の種類と時間を適切に配分できる。



5. 本時をまとめてから授業を終了することができる。



6. 予期できない状況が生じたとき，授業案を調整して対処できる。㊟



B. 内容 (Content)

1. 授業内容を，児童の持っている経験，知識，身近な出来事，文化などに関連づけて指導できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 既習あるいは未習を問わず，児童の習熟度やニーズに応じて，言語材料や話題を提供できる。①

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

C. 児童との交流 (Interaction with Learners)

1. 児童中心の活動や児童間の交流を支援できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 授業開始時に, 児童が授業に注意を向けることができるように指導できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 授業中, 児童の注意をそらすことなく授業に集中させることができる。㊸

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 児童の様々な学習スタイルに対応できる。㊸

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 可能な範囲で, 授業の準備・計画・進行において児童の参加を奨励できる。㊸

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. 児童が学習ストラテジーを適切に使えるように支援できる。㊸

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

D. 授業運営 (Classroom Management)

1. 個人学習，ペア活動，グループ活動，クラス全体などの活動形態を工夫できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. フラッシュカード，図表，絵などの準備や視聴覚教材を活用できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. ICT などの教育機器を効果的に活用できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 児童のニーズや活動の種類などに応じた様々な役割（情報提供者，調整役，指導者など）を果たすことができる。④

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 教室内外で児童が様々な ICT を使う学習を指導，支援できる。④

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

E. 教室での言語 (Classroom Language)

1. 英語の教科内容や学習の方法などを，視覚的ヒント，ジェスチャー，デモンストレーションなどを利用して英語で指導できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 英語を使って授業を展開するが，必要に応じて日本語を効果的に使用できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 児童が授業活動において英語を使いたくなるように設計し指導できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 教室で使用されている英語の理解が困難な児童に対して，適切な方法で支援できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 児童の日本語能力を必要に応じて学習内容に関連づけ，活用できるように促すことができる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

VI 自立学習 (Independent Learning)

序文

概要

学習者が自分一人で勉強ができるようになることは、教育の大きな目標と言えるでしょう。それは「自立」とか「自律」という言葉で表現されますが、両者はよく混同して使われます。他人に頼らず自分一人で学習している状態を「自立している」と言います。一方、自律は自立している状態の中でも、自分の学習経験を振り返りながら学習方法を身につけ、自分の学習に責任を持つ高度な能力と考えられます。この自律的な能力をつけることは、教師や保護者の願いでもあり、これまで様々な研究が行われてきました。本分野では、教師が児童に自律的な学習能力をつけさせるために必要な授業力を 7 つの領域にわたって扱います。

領域

A. 児童の自律 (Learner Autonomy)

児童が自分で進んで学ぶことができるようになるための支援の方法について扱います。

児童が興味・関心のあるテーマを選び、学習目標をたて、それを実施して振り返りを促すことが大切です。

B. 宿題 (Homework)

児童が進んで取り組むような課題について扱います。

C. プロジェクト学習 (Projects)

学習者中心の学び方であるプロジェクト学習について、その計画、実施、振り返りなどの支援について扱います。

D. ポートフォリオ学習 (Portfolios)

児童に学習の振り返りのツールであるポートフォリオを利用した学習について扱います。

E. ウェブ上での学習環境 (Virtual Learning Environment)

児童が自律的な学習としてインターネットで学ぶための支援について扱います。

F. 教室外活動 (Extra-curricular Activities)

校外学習、交流、国際協力活動などの支援及び評価について扱います。

A. 児童の自律 (Learner Autonomy)

1. 児童が自分の知識や能力を振り返るために役立つような様々な活動を設定できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童が自分の学習過程や学習成果を振り返ることができるように支援できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 児童が各自のニーズや興味・関心に合ったタスクや活動を選択するように支援できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

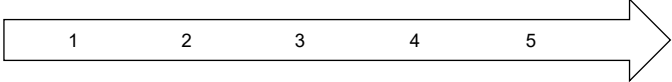
4. 児童が自分で目標や学習計画を立てることができるように手助けや指導ができる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

B. 宿題 (Homework)

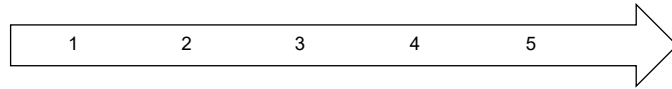
1. 授業外の時間でも，児童が進んで取り組みたくなるような課題を，必要に応じて設定できる。⑤

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

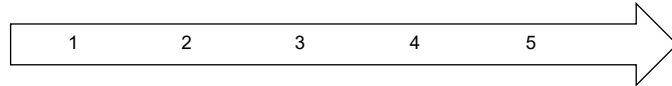


C. プロジェクト学習 (Projects)

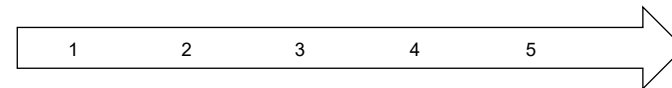
1. 日記や学習記録などを使って児童に振り返りを促すことができる。④



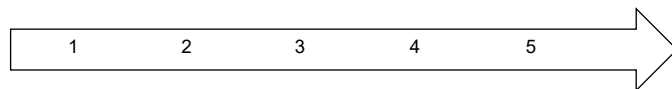
2. プレゼンテーション・ツールなどを用いて児童が英語で発表ができるように支援できる。④



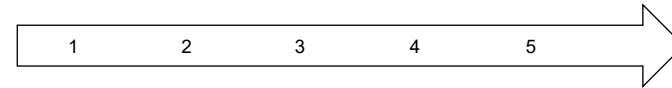
3. ねらいや目的に応じてプロジェクト学習を計画し実施できる。④



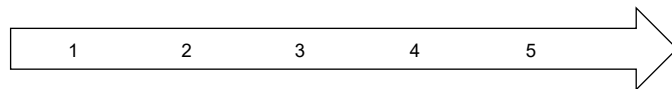
4. プロジェクト学習の様々な段階で、児童を適切に支援できる。④



5. 個人的に、また他の教員と協力して、教科横断的なプロジェクト学習を計画し編成できる。④



6. 児童と協力して、プロジェクト学習の過程と成果を評価できる。④



D. ポートフォリオ学習 (Portfolios)

1. 児童にポートフォリオを利用した学習に取り組ませるための指導計画を立案できる。⑤

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童にポートフォリオを利用した学習に取り組ませるための具体的な目標や目的を設定できる。⑤

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 児童にポートフォリオを適切に使えるように指導し，建設的なフィードバックを与えることができる。⑤

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 妥当で透明性のある基準に基づいてポートフォリオを利用した学習を評価できる。⑤

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

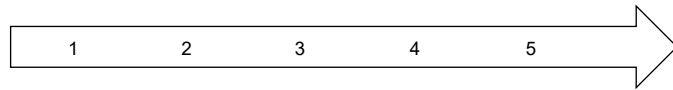
5. ポートフォリオを利用した学習の成果を自己評価したり，クラスメイトと互いに評価しあったりするように促すことができる。⑤

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

E. ウェブ上での学習環境 (Virtual Learning Environment)

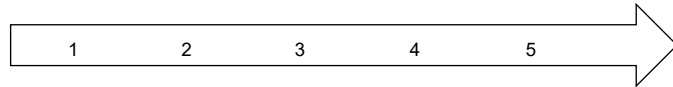
1. インターネットなどの ICT を児童が使えるよう適切に指導できる。Ⓐ

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



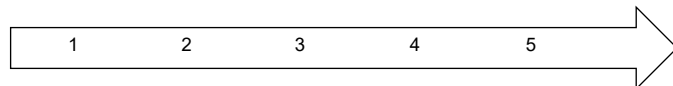
2. 児童が使用できる学習リソースを収集し，他の教員と共有できる。Ⓑ

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



3. ホームページの参照やウェブ上でのやり取りなど，様々な学習活動の場を設定して，児童の指導に活用できる。Ⓔ

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



F. 教室外活動 (Extra-curricular Activities)

1. 関係者と協力しながら交流を組織したり支援したりできる。④

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 学習効果を高めるような特別な活動の必要性を認識し、状況に応じてそれらの活動を設定できる。④

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 校外学習，交流，国際協力活動の学習結果を評価できる。④

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 語学体験を含む校外学習，交流，国際協力活動などの目的を的確に設定できる。④

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

VII 評価 (Assessment)

序文

概要

本分野では 4 つの領域を扱います。目標、指導、評価の 3 つは相互に関連しています。短期的かつ長期的目標を見据えて、何を、いつ、どのように評価するかという観点が必要とされます。特に小学校では、児童個々の特性をしっかりと観察して評価することが求められます。評価で得られた情報は、児童の学習支援と教師の指導改善にも活用できます。教授法などの別の領域と合わせて本領域を用いてもよいでしょう。

領域

A. 評価方法の考案 (Designing Assessment Tools)

目的に応じた多様な評価方法の選択と実施について扱います。

B. 評価 (Evaluation)

目的に応じた成績評価の方法や評価結果の児童・保護者へのフィードバックについて扱います。

C. 自己評価と相互評価 (Self- and Peer Assessment)

児童による自己評価と相互評価の際の支援のあり方について扱います。

D. 言語運用 (Language Performance)

4 技能 5 領域の適切な評価のあり方について扱います。

E. 国際理解 (文化) (Culture)

文化に関する児童の態度、知識、技能の評価のあり方について扱います。

F. 誤答分析 (Error Analysis)

児童の誤りに関する分析と適切なフィードバックのあり方について扱います。

A. 評価方法の考案 (Designing Assessment Tools)

1. 授業の目的に応じて，多様な評価方法（例：ポートフォリオ，自己評価，相互評価など）を選択できる。㊟

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童の授業への参加や活動状況を観察・評価できるような授業内活動を考案し実践できる。㊟

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 学習や学習の伸び具合を評価する方法を，児童と話し合うことができる。㊰

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

B. 評価 (Evaluation)

1. 信頼性があり透明性がある方法で、成績評価ができる。㉒

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童の英語運用力が向上するように、本人の得意・不得意分野を指摘できる。㉒

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 個人学習と協同学習における児童の能力を評価できる。㉒

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

4. 妥当性のある評価尺度を使って、児童の学習活動を評価できる。㉒

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5. 児童や保護者などにわかりやすい形式で児童の学習成果や進歩を記述できる。㉒

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

6. 児童の学習の伸びを信頼性のある適切な方法で評価し、その結果をわかりやすく説明できる。㉓

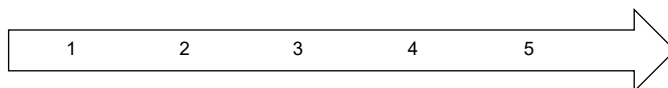
1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

7. 評価の経過と結果を自分の授業に活用し、個人およびグループのための学習計画を立てることできる（例えば形成的評価など）。㉔

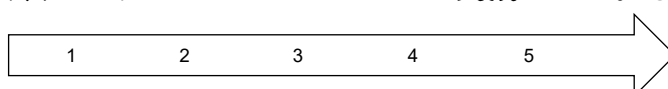
1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

C. 自己評価と相互評価 (Self- and Peer Assessment)

1. 児童が自分の目標を立て、自分の学習活動を自ら評価できるように支援できる。④



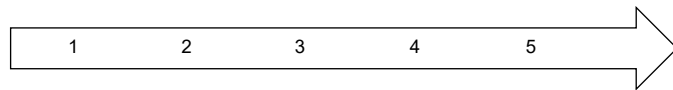
2. 児童がクラスメイトと互いに評価しあうことができるように支援できる。④



D. 言語運用 (Language Performance)

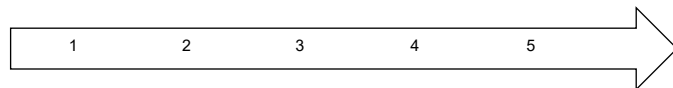
1. 話したり書いたりする能力を適切に評価できる。㉒

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



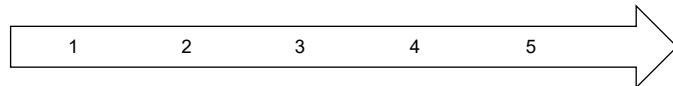
2. 内容、使用の適切さ、会話を円滑に進めるためのストラテジーなどの観点から、児童の会話能力を評価できる。㉓

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



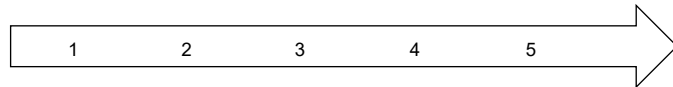
3. 内容、使用の適切さなどの観点から、児童の文字によるコミュニケーション能力を評価できる。㉔

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



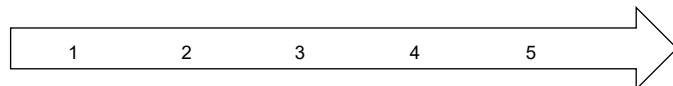
4. 要旨や特定の情報、言外の意味といった話し言葉を理解する児童の能力を評価できる。㉕

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



5. 要旨や特定の情報といった書き言葉を理解する児童の能力を評価できる。㉖

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---



E. 国際理解（文化）（Culture）

1. 日本の文化と外国の文化を比べ、その相違への児童の気づきを評価できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 異文化に関する児童の意欲・関心・態度を評価できる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

3. 異文化に接した時に、適切に対応し行動できる児童の能力を評価できる。⑩

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

F. 誤答分析 (Error Analysis)

1. 児童の誤りを分析し，適切なフィードバックができる。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2. 児童の誤りに対して，授業の流れやコミュニケーション活動の妨げにならないように対処できる。㊦

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

用語解説

アルファベット (alphabet)

表音文字の一種です。1つ1つの文字が原則として1つの母音または子音を表す文字体系のことです。ギリシャ文字の最初の2文字 α (アルファ), β (ベータ) からアルファベットと呼ばれます。アルファベットには、ギリシャ文字、キリル文字など数種類ありますが、英語教育でアルファベットという場合は、通例ラテン文字のことを指します。ラテン文字の中には、英語、ドイツ語、フランス語などヨーロッパ言語のアルファベットがあります。日本語のローマ字の体系もこの分類に入ります。

イントネーション (intonation)

ことばを話すときに声の高さを上げたり下げたりする抑揚のことで、話し手の意図や感情を表します。英語では、文の最後に起こる声の変化には、特徴的なパターンがあります。普通の文、命令文、あいづちの終わりは下げ（下降調と言います）、Yes/No で答えられる疑問文や聞き直す文では上げる（上昇調と言います）というのが典型です。（「強勢」と「リズム」の項を参照）

ウェブ上でのやり取り (Web interaction)

インターネット上でのコミュニケーション活動のことです。代表的なものとして、Eメールがありますが、外国語学習のツールとして、例えば無料電話の skype やインターネット掲示板の Padlet を使ってメッセージを交換することができます。また、Edmodo という教員と児童間のコミュニケーションや共同作業に役立つものもあります。

英絵辞典 (English picture dictionary)

英語の語句に、その事物を表すイラストや写真が掲載されている辞典です。視覚的に理解しやすいように作られており、初学者、特に小学生を対象としています。日本語訳も併記された英和辞典タイプや、CD で音声を確認できるもの、付属のタッチペンを使って遊び感覚で自分が選んだ単語や絵を音声で聞くことができるものもあります。

オーセンティック (authentic)

「本物の」という意味です。言語学習においてオーセンティックな教材とは、学習用として意図的に作られたものではなく、学習している目標言語が使われている社会で、母語話者が実際の場面で行っているコミュニケーション行動を利用した教材、という意味になります。海外で日常目にしたり聞いたりするもの、例えば、掲示、標識、紙幣やコイン、商品やそのパンフレット、雑誌、新聞、ラジオやテレビ番組、あるいは映画や DVD など含まれます。

音読 (oral reading/reading aloud)

声を出して読む読み方のことです。英語学習の初期段階では、音声と文字を結びつけることが音読の主なねらいとなります。英語を見たら声に出して読むことを習慣づけること

が大切です。音読によって、英語らしい発音や強勢、リズム、イントネーション（各項目参照）を身につけることが可能となります。（「黙読」の項を参照）

学習スタイル(learning style)

個々の子どもが得意としたり、好んで用いたりする学習の方法のことです。学習のさまざまな場面に対処する方法には個人差があります。ある問題を解決する時や受け取った情報を処理する時は、人によってさまざまな方法を用います。この方法を一般的には認知スタイルと呼びます。この認知スタイルの影響で、各個人の学習スタイルが生まれます。英語を学習する場合も、音を聞き取って真似るのが得意、文字を書き写したり書いたりすることが上手、文法などのルールを学ぶのが好き、異文化に対する興味・関心が高いなど、色々な子どもがいます。活動に様々な学習スタイルを取り入れると、より多くの子どもに関心を持たせることができると考えられます。

学習ストラテジー：学習方略(learning strategy)

学習をより早く、より効果的にするために子どもが意図的に行う心的操作や具体的な行動のことです。言語教育学者のレベッカ・オックスフォードは、目標言語の習得に直接かわる直接的方略と、学習を促進するための間接的方略に分類しています。前者は①記憶（例：語呂合わせで単語を記憶する）、②認知（例：図を使い情報を整理する）、③補償（例：単語の意味を推測する）に関するストラテジーで、後者は①メタ認知的（例：学習計画を立てる）②情意的（例：リラックスをするために深呼吸する）③社会的（例：友達と協力する）なストラテジーです。子どもが自分に合った学習方略を選べるよう、教師が支援することが必要です。

学習リソース (learning resources)

言語学習や言語教育に用いることができる、出版物や出版物以外の資料のことです。具体的には、教師が利用するものとして書籍、新聞、テレビ、ラジオ、インターネット、手紙やメールなどの他、同僚や ALT、ボランティア活動、地域のイベントなどが考えられます。子どもには親、友達、先生などが含まれるでしょう。これらは教材と区別した情報源となります。

カリキュラム・マネジメント(curriculum management)

原則として、「各学校が、学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営みである。」（田村，2011）と定義されます。特に小学校外国語教育においては、教育観・学習観を教員間で共有する取り組みを学校の組織全体で進めることが、カリキュラム・マネジメントを成功させるポイントになる、という指摘があります。

教科横断的 (cross-curricular)

複数の教科にまたがる学習の状態を指します。学習指導要領で示された上述のカリキュラム・マネジメントの視点の1つとして、外国語教育においても「言語活動で扱う題材は、

子どもの興味・関心に合ったものとし、国語科や音楽科、図画工作科など、他教科等で子どもが学習したことを活用し」と他教科との連携が示唆されています。この課題に対処するには、例えば、全ての学校行事や各教科等の単元・活動を月ごとにまとめてみることで、こうすることで、各行事や教科等での学びが、子どもの中でどのように関連付けられていくのかを指導者は意識することができ、教科間等の関連性が見えてきます。

強勢 (stress)

日本語の音の特徴は高低ですが、英語は強弱です。強勢とは、単語、語句、文、談話の各レベルで強く発音される部分のことです。英語で話すときに、日本語のように高低の音声パターンを使ったり、強勢の位置を間違えたりすると意味が通じなくなるので、この指導はとても大切です。小学生には、英語の童謡やチャンツがいいでしょう。一方、強勢をアクセントともいいますが、こちらには「訛り」という意味もあります。(「イントネーション」と「リズム」の項を参照)

グループリーディング(group reading)

子どもがグループになって英語を読む活動全般を指します。グループの全員で一斉に読む、ひとり一文ずつ順番に音読する、教師が文をなぞる指の動きに合わせてグループで一斉に読むなどの方法があります。国語の授業で使われる役割読みもグループリーディングといえます。これらの方法は、個人で英語を読む心理負担を軽減し、子どもひとり一人に責任を持たせたり、ひとりで読む回数をできるだけ多くするねらいがあります。

形成的評価(formative assessment)

指導過程の途中で、教師の指導法と子どもの学習活動を調整するために行う評価で、成績評定には使いません。小テストの結果の分析、子どもの発問に対する応答や行動の観察などから評価します。どの程度学習内容を理解・習得しているかを把握することで、教師は支援を増やしたり、指導方法や内容を変更したり、個別相談・個別指導などを行います。評価には他に、子どもの学習実態を把握するための診断的評価、成績評定をつけるために行う学年末試験などの総括的評価があります。

言外の意味 (connotation)

言葉として直接表現されない意図や感情のことです。含意、ニュアンス、示唆(ほのめかし)などの概念が含まれます。外国語学習の場合には、ことばと文化の関連性の観点で考えるとよいでしょう。小学校では、色や動物に関する日本語と英語の表現やイメージ・連想の違いなどは子どもにも興味を引く話題となります。体系的な指導は難しいでしょうが、例えば、虹の色は世界中同じだろうか、ソーセージを挟んだパンを a hot dog というのはなぜか、などの話題から外国語と日本語との表現や連想の違いを調べさせたり話し合わせたりするのは、ことばと文化の関連や多様性への気づきを促す発展的な学習となります。

言語活動(language activity)

英語を理解し、英語で表現する運用能力を育てるために、4技能(聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと)に加えインタラクション(やり取り)を構成要素として言語使用を実践する活動のことです。小学校の場合には、学年に応じて次のような活動を行うことを学習指導要領では求めています。具体的な活動事例は『小学校学習指導要領解説』を参照するとよいでしょう。

- ・ 言語や文化について体験的に理解を深める。
- ・ 日本語と外国語との音声の違い等に気付く。
- ・ 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ。
- ・ 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。
- ・ 言語やその背景にある文化に対する理解を深める。
- ・ 相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

言語材料(language material)

音声、文字および符号、単語、連語、慣用表現、文法事項(文の種類や構造を含む)など、言語活動を行うのに必要な素材のことをさします。具体的には、『小学校学習指導要領解説』を参照してください。

言語の使用場面(language situation)

コミュニケーションが行われる場面を指します。学習指導要領では、言語の使用場面の例として、家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事など「子どもの身近な暮らしに関わる場面」と挨拶、自己紹介、買物、食事、道案内、旅行などの「特有の表現がよく使われる場面」が挙げられています。

言語の働き(language function)

言語を用いてコミュニケーションを図ることで達成される機能や役割を示しています。具体例として、コミュニケーションを円滑にする、気持ちを伝える、事実・情報を伝える、考えや意図を伝える、相手の行動を促すがあります。

コア・カリキュラム(core curriculum)

教職課程で用いられているコア・カリキュラムは、教育職員免許法等で定められた教職科目のうち「教職に関する科目」の各科目について、全国すべての大学の教職課程で教職履修生が修得すべき資質能力を共通的に示し、そこに至るために必要な学習内容や到達基準を構造的に示すものです。コア・カリキュラムに記載されている学習項目は、各大学の教職科目で扱うべき必要最低限であり、全ての内容を盛り込むことが想定されていますが、学習すべき順序、設定方法、授業回数などについては、各大学において独自の取組みが可能となっています。2017年3月に公開された小学校教員養成課程外国語(英語)コア・カリキュラムでは、「外国語/英語科の指導法」及び「外国語/英語科に関する専門的事項」

で構成され、それぞれにおいて、「全体目標」「一般目標」「学習項目」「到達目標」が示されています。なお、現職教員向けの小学校教員研修外国語（英語）コア・カリキュラムも策定されています。

語順 (word order)

語の順番のことで、言語によって、語を並べる原則に違いがあります。世界の言語を分類する言語類型論において「基本語順」という考えがあります。その観点で分類すると、英語は《主語》＋《動詞》＋《目的語》の語順になり、日本語は《主語》＋《目的語》＋《動詞》の語順になります。

誤答分析 (error analysis)

子どもの英語の誤りの原因を語彙、文法、語法などの観点から分析することです。子どもがつまづいている箇所とその原因を把握して指導に生かしていくことで、実態に応じた指導が可能となります。また、文法的には間違っているが意図は伝わる些細な誤りと意図が伝わらない致命的な誤りを区別して、言語習得の観点から前者には寛容に対処するとともに、誤りを責めるのではなく、子ども自身が誤りに気づくように促す指導が求められます。

語尾の変化 (inflection)

時制、法、人、数、性別などの文法的な機能または属性を表現するために、単語の語尾が変化することです。例えば、動詞が過去を表す時制では-ed をつけたり、人を表すときは、player のように、-er をつけたりすることです。

視覚補助教材 (visual aids)

教室の指導における補助として、写真、スライド、映像、音響機器などを利用して、子どもの視覚と聴覚に直接訴え、教育の効果を高めようとする教材のことです。最近では、デジタル教材や電子黒板を中心とする ICT 機器の利用も増えています。

授業案 (teaching plan)

授業の計画書のことで、教員が授業をどのように進めていくか、時間配分とともに指導内容や活動内容を記載します。また子どもへの言葉かけや助言、指導の注意点などを記載することもあります。授業案には、主に自分で授業の流れを確認するために大まかに書いた「略案」と、他人に見せて流れを理解させることもできる授業の流れや発問を細かく記述した「細案」の2種類があります。

社会文化的能力 (socio-cultural competence)

社会で生きる上で必要な言語的、機能的、社会文化的な知識を適切に使う能力のことです。言語的には、例えば日本語の敬語のように、場所や相手の年齢などを踏まえて適切に表現できること、英語では子どもが大人に対して、“please” や “Would you…?” や “Could you …?” などの丁寧表現ができることを指します。小学校の外国語の授業では、よく “Big

voice” “Smile” “Eye contact” を使うように指導されますが、英語圏の社会では一般的とされる態度だからです。言語能力以外にも、このように適切な態度や行動ができるようにする指導（他にも “Good listener” や “Speak clearly” など）は望ましいでしょう。

受容語彙(receptive vocabulary)

語形を認識し、意味が理解できるが話したり書いたりするレベルに達していない語彙のことです。子どもの習熟段階によって異なるので、レベルに応じて判断する必要があります。例えば、教室英語などで教師が繰り返し使う語彙や、絵本の読み聞かせなどで、絵を見てわかるような語彙は、子どもに理解されるようになるので、必要がなければ、子どもに指導しなくてもよいでしょう。(⇒「発信語彙」参照)

使用頻度（単語）(word frequency)

雑誌、新聞、映画、教科書などの言語資料（コーパス）において、出現する頻度が高い語は、有用な語彙と考えられ、客観的に基本語彙を抽出する基準として用いられています。抽出された基本語彙のリストは語彙表と呼ばれ、学習すべき語として指導に使える教育語彙表が作成されてきました。日本人英語学習者向けに開発された教育語彙表で代表的なものは、大学英語教育学会(JACET)刊行の使用頻度 8000 位までをリストにした『JACET8000』です。

スキミング(skimming)

リーディング活動の内の速読のストラテジーの 1 つで、例えば、新聞を例にとると、見出しを参考にしながら、記事の大意や概略を把握するために、素早く全体に目を通す読み方です。（「スキニング」の項を参照）

スキニング(scanning)

リーディング活動の内の速読のストラテジーの 1 つで、例えば、新聞のテレビ欄で見たい番組を探したり、広告やパンフレットで求める品物などを探したりするように、自分にとって必要のない情報は読み飛ばし、必要な情報を求めて素早く読む方法です。（「スキニング」の項を参照）

ステレオタイプ (stereotype)

特定の集団に対して、多くの人が共有している先入観や思い込みなどの固定観念のことです。人間の脳内の情報処理容量は限られているために、他者と出会った際に、その人が属する集団に対して過度の一般化を行なうことによって引き起こされると考えられています。ステレオタイプは、偏見や差別などにつながる場合があります。これを避けるには相手を所属する集団から判断しないで、個人として向き合うことが大切です。

相互評価 (peer-assessment)

ピア評価とも呼ばれます。主として、ライティングやスピーキング活動に対して、子どもが他の子どもに対してフィードバックを与えることです。ループリックを使った評価や、

コメントシートの活用などがあります。これにより、子ども同士の関係性や動機づけを高めることができます。また、読み手や話し手をより意識した活動をすることも期待されます。教員だけでなく、子どもも評価に参加することで、学びに対する責任感や主体性を促進する狙いもあります。

タスク (task)

外国語のコミュニケーション能力を育成することを目的として、子どもに課される課題のことを指します。子どもは、タスクを遂行するために、目標言語を実際に使いながら、意味中心の言語活動を行います。教師は、タスクの難易度を調節したり、特定の言語形式の使用を必然化するなど、子どもの習熟度や目的に応じて、タスクをデザインします。タスク活動を実施する際には、事前の準備活動（スキーマの活性化など）、タスク活動後には振り返りや言語形式の確認を行うとよいでしょう。

デモンストレーション (demonstration)

主として、教師やALTが、他の子どもたちの前で、実際に英語を用いた活動を1つのモデルとして見せることです。子どもは実際に英語を使用している場面を見ることで、やり取りの目的や状況などを理解して、自分も英語を使ってみようという意欲を持つことができます。

ニーズ／児童（学習者）のニーズ (learner/learning needs)

学校の授業や個人的な学習経験を通して学習者が身につけたいと思っていることや、必要としている学びのことを「学習者のニーズ」言います。児童（学習者）のニーズと、彼らが持っている知識、技能、熱意などとの間にはギャップがあります。したがって、学習到達目標や授業計画を立てる際には、ニーズ分析を行うことが有効です。具体的には、児童が既に知っていることや実際にできること、これから学びたいことやできるようになりたいことを質問したり観察したりして探り出し、授業の計画や実践に活かします。

発信語彙 (productive vocabulary)

伝えたい意味を適切な発音や綴りで表現できる語彙のことです。発表語彙とも呼ばれます。語彙の知識は、聞いたり読んだりするときに理解できる受容語彙の知識から、徐々に発信語彙知識へと発展していくと考えられています。発信語彙を増やすためには、教室の言語活動において、子どもが同じ単語や表現に何度も接し、それらを繰り返し使う機会を与えることが大切です。（⇒「受容語彙」参照）

非言語コミュニケーション (non-verbal communication)

ことばによらないあらゆる形態のインタラクション（相互交流）を指します。ジェスチャー（身振りや手ぶり）、顔の表情やアイ・コンタクトの有無、声の使い方（リズム、大小、強弱など）、空間の使い方（相手との距離など）、間（ま）の取り方、髪型や服装などさまざまな要素があり、しばしば言語以上に相手に強い印象を与えることがあります。とりわけ、文化が異なる話者間では、その解釈に誤解が生じることも多いので、適切な指

導が必要となります。

評価尺度 (evaluation scale)

子どもの言語活動の評価を行なう際に用いられる尺度のことです。子どものパフォーマンスを評価する際に、学習の到達目標がどの程度達成されているかを、いくつかの尺度を用いて肯定的に評価することにより、子どもの自己効力感や自律性を高めるとされます。例えば、①〇〇はまだ難しい、②友達と相談しながら〇〇ができる、③自分一人で例を参考に〇〇ができる、④自分一人で何も見なくても〇〇ができる、というような尺度を用いて評価することが可能です。このように尺度を用いることにより、客観的かつ段階的に評価をすることができます。

プレゼンテーション・ツール (presentation tool)

プレゼンテーション（発表）の時に内容を聴衆にわかりやすく伝えるために用いられる道具のことです。主に、PowerPoint などの iPad やパソコンで使えるプレゼンテーション用のソフトウェアを指しますが、キーボードの操作を必要とせず子どもでも簡単に使えるソフトウェア（ロイロノートなど）も多数あります。これらのソフトを使えば、手書きで文字を書いたり、写真を取り込んだりして、簡単に発表資料を作成することができます。

プロジェクト学習 (project-based learning)

先生や子ども自らが設定した課題に対する解決や答えを求めて、一定の期間にわたり、子どもが主体的かつ創造的に取り組む学習法です。子どもにとって身近な題材や、社会とのつながりを意識させる題材を扱うとよいでしょう。調べ学習を行うための辞書、本、インターネットを活用する、調べた情報を組み合わせる、他の子どもと協同する、自らの学習を振り返る、などさまざまなスキルの習得が期待できます。

文化とことばの関係性 (relationship between culture and language)

文化とことばには密接な関係があります。外国語を適切に使うためには、それを使用する人々の文化、とりわけ、表面的にはわかりづらい、思考様式、信条、習慣などの行動規範についても知る必要があります。絵本などの視覚教材を使い、文化を比較・対照させたり、類似点や相違点を学ばせるとよいでしょう。世界には多様な考え方、物の見方があり、それらを表すことばが存在することに興味を持てば、外国語を学ぶ動機づけを高めることが期待できます。

ポートフォリオ学習 (portfolio work)

ポートフォリオとは元来ワークシートやレポート、単語テストなどを入れる紙挟みのことです。授業におけるポートフォリオ学習とは、学習過程で生成された多様な形態の提出物や成果物を通して、学習のプロセスや子どもが本来持っている能力を総合的に引き出そうとするものです。子どもが自己の学びと向き合い、成長を可視化し、自立した学びと動機づけに繋げることが可能になります。与えられる学びから主体的な学びへと学びの形を変えるうえで、ポートフォリオ学習は有効と考えられています。

黙読 (silent reading)

声を出さずに、頭の中で文章を読むことです。黙読は日常的に最もよく行われる読む活動です。黙読は、音読と比べて、音声化を伴わないため、より速く読むことができます。また、音読と比べて、読んだ内容をより長期間記憶する点で優れていると考えられています。教室内で取り入れやすく、他人を意識せず、自分のペースで行えるというメリットもあります。

リズム (rhythm)

英語は強弱で話される音声特徴を持っています。弱い部分はいまいに発音され、強く発音される部分によって一定のリズムが保たれます。原則として内容語（名詞、動詞、形容詞、副詞）は強く、機能語（前置詞、接続詞、助動詞、など）は弱く発音されます。小学生が英語のリズムに慣れるには、強勢の場合と同様に英語の歌(特にマザーグースなど)やチャンツを利用するとよいでしょう。（「イントネーション」と「強勢」の項を参照）

参考文献

- JACET 教育問題研究会編（2017）.『行動志向の英語科教育の基礎と実践』三修社
 文部科学省（2017）.「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」
 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則（2015）.『改訂版 英語教育用語辞典』大修館
 田村知子他（2011）.『カリキュラムマネジメントを促進する教員研修の 企画・運営ガイド』
http://www1.gifu-u.ac.jp/~totamura/file/study2/guide_book.pdf
 米山朝二.（2011）.『新編 英語教育指導法事典』研究社

英語学習・授業実践・研修等の記録

① 英語学習記録（資格検定試験の結果、海外研修、留学など）

英語の学習や英語の資格試験結果、海外研修、留学などについて記入しましょう。教師は英語の指導者であり学習者でもあります。自分の成長の可視化は励みになりますし、失敗した理由を記録していくと、改善方法を考えるきっかけをつかんだり、先生などに相談したりする際の有効な資料になります。

実施日	学習事項	概要	コメント
(例) 2021 年 11 月	英検の受験	英検 2 級の公開テストを受験。	1 次試験(筆記)は通ったが、2 次(スピーキング)で失敗。緊張で頭が真っ白になった。来年再挑戦する。

② 英語の授業実践記録

教育実習，模擬授業，授業観察，学習支援学校でのボランティア，塾講師，家庭教師，仲間とのプロジェクト学習，学校行事補助などについて記入しましょう。また，資料の有無も記入しましょう。資料や指導案などは日付を付けて保存すると，改善したり再利用したりして活用することができます。このページが足りないときは，ルーズリーフなどを使って足していきましょう。

実施日	実践事項	概要	コメント	資料の有無
(例1) 2021 年 9 月 10 日 ～ 2022 年 3 月 20 日	家庭教師(小学校 5 年生 1 名)	週 1 回 2 時間， 小学 5 年生を対 象に，家庭教師を した。特に英語の 文字の読み書き を中心に教えた。	最初は，なかなか上手に教 えることができなかった が，フォニックスのテキス トを利用し始めたら自分で も学ぶことが多く，徐々に 効果が上がり，子どもも何 とか読んだり書いたりでき るようになった。	X
(例2) 2021 年 5 月 15 日	第 1 回模擬授業	外国語科教育法 の授業で，2 人 1 組で 20 分間の 模擬授業を実施。 対象：小 6。各担 当 10 分。	準備不足のため，時間内に 指導案の内容を終えること ができなかった。次回は， 事前に時間を計って，十分 に準備をして臨みたい。	○

実施日	学習・実践事項	概要	コメント	資料の有無

③ 研修・研究授業・学会発表あるいは国際交流などの実践記録（現職教員用）

種々研修や学校内外での研究授業，学会発表，あるいは，国際交流などの実績について記入しましょう。また，②と同様に，資料の有無も記入しましょう。

実施日	実践事項	概要	コメント	資料の有無
(例) 2021 年 7 月 8 日	市内一斉研究日公開研究授業	5 年生の外国語の授業を公開，事前は外国語部会メンバーと指導案作成について，事後は協議会で実践について検討を行った。	テーマは「一日の行動」。事前の検討会で先輩の先生方からの助言を受け，子どもの実態に合った内容で活動することができた。事後の協議会では各活動の時間配分についてまだ検討の余地があるといった意見が出た。	○

実施日	学習・実践事項	概要	コメント	資料の有無

利用者のために

Ⅰ. J-POSTL エレメンタリーの開発過程

■ 5 段階の開発過程

J-POSTL エレメンタリーの自己評価記述文は、中等英語教員教育のための J-POSTL (JACET 教育問題研究会、2014) に収録された 180 の自己評価記述文 (以下、記述文) の言語教育理念を共有しつつ、小学校教育の文脈に合わせて一部修正したり、削除したり、新たな項目を追加したりすることにより、以下の 5 段階で開発されました。

- ・ **第 1 段階** (2016 年 6 月から 2017 年 1 月)：J-POSTL の 180 の記述文について、延べ約 90 人の小学校の現職教員と英語支援員を対象にした計 5 回の聴聞会と、E メールによる意見聴取を行いました。
- ・ **第 2 段階** (2017 年 5 月と 7 月)：第 1 段階の意見を踏まえ、諮問委員 7 人、編集委員 8 人により、記述文特定のための 15 時間に及ぶ検討会議を行いました。その結果、合計 167 の記述文草案 (以降、草案) を作成しました。その内訳は、19 記述文は J-POSTL と同一文言、120 記述文は部分修正、28 記述文は追加した記述文となっています。追加した記述文は主として教授法の 4 技能 5 領域に属します。
- ・ **第 3 段階** (2018 年 1 月～8 月)：草案について、全国の大学初等・中等教職課程英語教育担当者を対象として調査を行いました。その結果を踏まえて、教職課程履修生用として 93 の記述文を選定し、【教職課程試用版】を作成しました。残りの 74 は現職教員用の記述文としました。
- ・ **第 4 段階** (2018 年 11 月～12 月)：現職教員用の 74 の記述文について、小学校の常勤現職教員を対象として全国調査を行いました。その結果を集計・分析し、現職教員の授業力の目安として、「初任」「育成」「中堅」「熟達」という 4 段階の能力スケールで記述文を分類しました。
- ・ **第 5 段階** (2018 年 9 月～2021 年 3 月)：【教職課程試用版】の 93 の記述文について、履修生のための記述文を特定するための試行調査を 13 大学の初等教職課程において実施しました。

以上の通り、J-POSTL エレメンタリーにおける自己評価記述文は、教職課程履修生、小学校現職教員、英語支援員、教職課程の英語教育担当者など小学校英語教育に携わっている多くの方々の意見を反映したものとなっています。

■ 開発過程で明らかになったこと

まず第 1・2 段階で明らかになった基本的な指導上の留意点は、以下の 3 点です。

- ・ 文字は入念に教える。
- ・ 文法は明示的に教えない。

- ・ 宿題は出さないで、自主的な学習を促す。

次に、第 3・4 段階の開発過程を通じて、小学校教員と中学・高校の英語教師とでは、教授法の 4 技能 5 領域と文法・語彙以外でも、重視すべき指導項目に意識の違いがあることが分かりました。履修生を含めた 5 段階の能力スケール（「実習生」「初任」「中堅」「熟達」）の分類によると、中等英語教員には比較的高度な能力として意識されていても、小学校では基本的な能力と考えられている記述文が散見されます。それらの記述文の内容をまとめると以下の 5 つの観点になります。もちろん中学・高校とは指導内容は異なりますが、小学校英語教育の特性として抑えておく必要があります。

- ・ ICT などの教育機器を活用する。
- ・ 学習の見通し（計画・目標）を具体的に示す。
- ・ 異文化に対する関心・意欲を高める。
- ・ 臆せずコミュニケーションを図る態度を養う。
- ・ 個々の児童の特徴を配慮し、対応・評価する。

2. 「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけて

2017 年に告示された『小学校学習指導要領解説 外国語編』（以降『解説』）の背景には、2016 年 12 月に中央教育審議会（中教審）から出された『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（文部科学省 2016）（以降『答申』）があります。その中で、「主体的・対話的で深い学び」に対する考え方（キー・コンセプト）が言及されています。下記の表は、『解説』と『答申』に記述されている内容を基に、それぞれのコンセプトに含まれる要素をブレイクダウンし、記述文を対応させたものです。児童の「主体的・対話的で深い学び」の構成要素と記述文がどのように結びつくのかが簡潔に表されています。記述文が、教師の成長だけでなく、児童の成長にもつながることを理解して、J-POSTL エレメンタリーを活用していただくことを推奨します。

■ 「主体的学び」を育成する自己評価記述文の例

「主体的学び」の要素	児童の学びを支援する自己評価記述文の例
生涯にわたって外国語習得に取り組む	生涯学習 ：J-POSTL の基本理念の 1 つで、特に「VI 自立学習」の分野の記述文と対応する。
学習の見通しを立てる	・ 学習指導要領と児童のニーズに基づいて到達目標を考慮できる。（I-B-5） ・ 児童と保護者に対して英語学習の意義や利点を説明できる。（I-C-7） ・ 児童のニーズ、興味・関心を考慮し、学習指導要領の内容に沿った学習目標を設定できる。（IV-A-1）

	・ 年間の指導計画に即して，単元や授業ごとの学習目標を設定できる。(IV-A-2) ・ 児童が自分で目標や学習計画を立てることができるよう に手助けや指導ができる。(VI-A-4)
学習を振り返る	・ 児童が自分の学習を振り返ることができるような目標を設定できる。(IV-A-4) ・ 児童が自分の学習過程や学習成果を振り返ることができるよう に支援できる。(VI-A-1)
学びの変容を自覚する	・ 日記や学習記録などを使って児童に振り返りを促すことができる。(VI-C-1) ・ 児童と協力して，プロジェクト学習の過程と成果を評価できる。(VI-C-6) ・ 児童や保護者などにわかりやすい形式で児童の学習成果 や進歩を記述できる。(VII-B-5) ・ 児童が自分の目標を立て，自分の学習活動を評価できるように 支援できる。(VII-C-1)
興味や関心を持つ	・ 児童が英語を学習する動機を考慮できる。(I-B-1) ・ 児童の年齢，興味・関心，英語力に適した教材を選択できる。(III-2) ・ 児童の興味・関心を引きつける方法で授業を開始できる。 (V-A-1)
身に付いた資質・能力を共有する	・ ポートフォリオを利用した学習の成果を自己評価したり， クラスメイトと互いに評価しあったりするように促すことができる。 (VI-D-5) ・ 児童がクラスメイトと互いに評価しあうことができるように 支援できる。(VII-C-2)

■ 「対話的学び」を育成する自己評価記述文の例

「対話的学び」の要素	児童の学びを支援する自己評価記述文の例
グループなどで対話する	・ 知り合いや初対面の人と挨拶を交わしたり，相手に指示・依頼などをして，それらに応じたり断ったりするための活動を設定できる。(II-A-A-1-2) ・ 児童同士のやり取りを促す活動計画を立案できる。 (IV-C-2)
対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする	・ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について，自分の気持ちや意見を伝え合う力を育成するための活動を設定できる。(II-A-A-1-3) ・ 相手の言ったことに対する確認や聞き返しができる力を育成するための活動を設定できる。(II-A-A-1-6)

	・ ホームページの参照やウェブ上でのやり取りなど、様々な学習活動の場を設定して、児童の指導に活用できる。(VI-E-3)
子供同士が協働する	・ 児童を話す活動に積極的に参加させるために、協同的な雰囲気を作り出し、具体的な言語使用場面を設定できる。(II-A-A-I-I) ・ 個人活動、ペア活動、グループ活動、クラス全体など、状況に応じて学習の形態を柔軟に調整できる。(V-A-2) ・ ねらいや目的に応じてプロジェクト学習を計画し実施できる。(VI-C-3)
教職員と対話する	・ 教材、授業内容、授業の進め方などに関して、児童と協同し、彼らの意見も取り入れた指導計画を作成できる。(IV-B-II) ・ 可能な範囲で、授業の準備、計画、進行において、児童の参加を奨励できる。(V-C-5) ・ 児童にポートフォリオを適切に使えるように指導し、建設的なフィードバックを与えることができる。(VI-D-3) ・ 学習や学習の伸び具合を評価する方法を、児童と話し合うことができる。(VII-A-3)
地域の人々と対話する	・ 学習効果を高めるような特別活動の必要性を認識し、状況に応じてそれらの活動を設定できる。(VI-F-2)
先哲の考え方	・ 教科書以外の素材（絵本、事典、図鑑、文学作品、新聞、ウェブサイトなど）から、児童のニーズに応じた教材を選択できる。(III-4)

■ 「深い学び」を育成する自己評価記述文の例

「深い学び」の要素	児童の学びを支援する自己評価記述文の例
社会や世界との関わりの中で事象を捉える	・ ICT 等を用いて、様々な地域、人々、文化などについての調べ学習の機会を与えることができる。(II-G-3) ・ 児童に社会文化的な規範（習慣や決まりなど）の類似性と相違性を気づかせる様々な種類の教材や活動を選択できる。(II-G-5) ・ 児童が自分のステレオタイプの考え方に気づき、それを見直すことができるような様々な種類の教材や活動を選択できる。(II-G-8)
外国語やその背景にある文化を理解する	・ 児童に文化とことばの関係性に気づかせる教材や活動を選択できる。(II-G-7)

	・ 言語と文化の結びつきに気づかせるような活動を立案できる。(IV-B-9)
相手に十分配慮する	・ 他者との関わりを意識し、価値観の相違への気づきや理解を促すことに役立つ、様々な種類の教材や活動を選択できる。(II-G-6)
知識を相互に関連付ける	・ 児童がこれまでに学習した知識を活用した活動を設定できる。(IV-B-2) ・ 授業内容を、児童の持っている経験、知識、身近な出来事、文化などに関連づけて指導できる。(V-B-1)
情報を精査して考えを形成する	・ 情報検索のために図書館やインターネットを使えるように児童を指導できる。(III-9) ・ 児童に役に立つ辞書や参考資料を推薦できる。(III-10)
問題を見いだして解決策を考える	・ 児童が各自のニーズや興味・関心に合ったタスクや活動を選択するように支援できる。(VI-A-3) ・ 児童にポートフォリオを利用した学習に取り組ませるための指導計画を立案できる。(VI-D-1) ・ 児童にポートフォリオを利用した学習に取り組ませるための具体的な目標や目的を設定できる。(VI-D-2)
思いや考えを基に創造する	・ 児童に対して、自分や他の児童のための学習材料となるような作品を作るよう指導し、それを活用できる。(III-11) ・ プレゼンテーション・ツールなどを用いて児童が英語で発表ができるように支援できる。(VI-C-2)

『小学校英語指導者のポートフォリオ』
(J-POSTL エレメンタリー)
J-POSTL for Elementary-school Teacher Education

2021 年 3 月 7 日 初版第 1 刷
編集発行人：JACET 教育問題研究会
JACET SIG on English Language Education
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
早稲田大学商学学院 神保尚武 気付
URL: <http://www.waseda.jp/assoc-jacetenedu/>
印刷所：有限会社 桐文社
〒142-0053 東京都品川区中延 6-2-22 エボンビル 1 階
電話：03-3781-4010

- ・ 本ポートフォリオは、2019～2021 年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究課題番号 19H01288（研究代表：神保尚武）の研究補助費を受けて制作したものである。
- ・ 本書の一部あるいは全部を引用または複写複製する場合には本書より引用したことをお断り下さい。

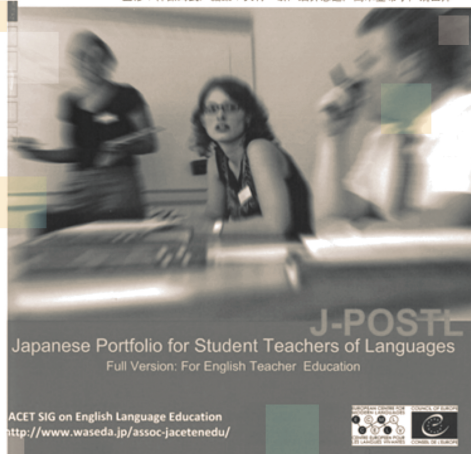
原作:ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ
EPOSTL (European Portfolio for Student Teachers of Languages)

成長のための省察ツール

言語教師のポートフォリオ

【英語教師教育全編】

JACET教育問題研究会 編
監修: 神保尚武 / 編集: 久村 研, 酒井志延, 高木亜希子, 清田洋一



成長のための省察ツール

言語教師の ポートフォリオ

JACET教育問題研究会 2014

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/>

監修: 神保尚武

編集: 久村 研

酒井志延

高木亜希子

清田洋一

■ 「言語教師のポートフォリオ」は中等教育の言語（英語）教師のための省察ツールです。このポートフォリオの主な特徴は次の通りです。

- ・ 英語教師に求められる授業力を明示する。
- ・ 授業力とそれを支える基礎知識・技術の振り返りを促す。
- ・ 同僚や指導者との話し合いと協働を促進する。
- ・ 自らの授業の自己評価力を高める。
- ・ 成長を記録する手段を提供する。

■ 本ポートフォリオの中核には、Can-Do形式の180の自己評価記述文があります。これらの記述文は、授業力に関する系統的な考え方を提供しており、単なるチェック・リストではありません。教職課程の履修生、現職教師、実習や教員研修の指導者・メンターなどが利用したり、お互いに意見を交換したりする際に、省察を深めるツールとして機能すること、教職の専門意識を高める役割を果たすことが期待されます。

大学英語教育学会（JACET）教育問題研究会
JACET SIG on English Language Education
<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/>